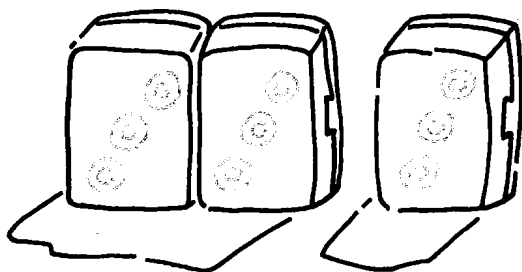


ムツゴロウ 麻雀物語

畑 正憲



ムソゴロウ 麻雀物語



角川書店

ムツゴロウ麻雀物語

昭和五十九年十一月十日 初版発行

著 著 畑 正 憲

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角 川 春 樹 店

東京都千代田区富士見二の十三
①一〇二(東京)一九五二〇八
電話 (三三三六八五二) (編集部)
(三三三六八五二) (営業部)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします



©Masanori Hata 1984, Printed in Japan

ISBN4-04-872394-4 C0093

目次

第一話 いろいろ麻雀泣き笑い 五

第二話 剣豪雀豪五味康祐 五九

第三話 命のこだま 人の運 一五

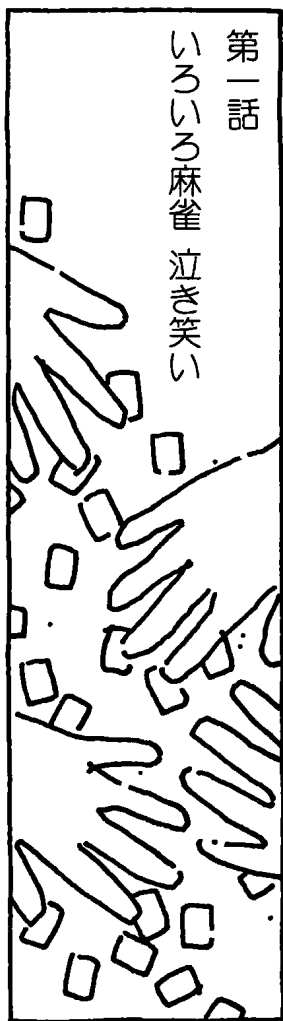
第四話 運不運流されるまま 一六

装丁・本文イラストレーション
丸山容爾

ムツゴロウ麻雀物語

第一話

いろいろ麻雀 泣き笑い



1

金ピカのレストランに、私だって年に何度かは座っていることがある。

随所に蘭の花が咲きこぼれ、高い天井に無数に吊るされているライトからは、やわらかい光が落ちてきている。一隅に置かれたピアノを奏でるのは、白いドレスを着た絶世の美女であり、鍵盤の上を舞うのは白魚のような細い指だ。

蝶ネクタイをして、ダークスーツに身をかためた男が、音もなく近寄ってきて、フォトアルバムほどあるメニューをうやうやしく差し出す。そして、ニヤリと笑って言うのである。

「最近、あっちの方どうですか」

両手を胸のあたりまで持ってきて、盛んに何かと掻きまわす素振りをする。

「何かと忙しくて、ご無沙汰してますなあ」

「そんなことないでしょう。今日もこれから約束があるんじゃないですか」

男は、片目をつむって、どーんと私の肩を叩くのである。親近感があふれていると言えばそれまでだが、折角のムードが壊れてしまい、場末のヤキトリ屋へ行っている感じがしてくるから妙だ。

私はワインに口をつけ、

「やりますか、一丁」

「ウヒヒヒ、いいスねッ」

そしてまた、ドーン、である。私の口の中で転がっている、決して安くないワインは、ぷつと噴き出し、テーブルをよごしてしまふのだ。

このようになるとは、考えてもみないことであった。

タクシーに乗れば運転手が振り返り、

「あちしも好きでしてねえ……」

とくる。女かなと身構えると、

「この前の明け番の日、五枚から国士無双をやったんです。五枚からですぜ。なあに初手からねらってたわけではねえんですが、手の方が勝手に動きまして、気がついてみたら形が出来

てたってわけ。あるんですね、そんなことが。いやあ、驚きました、驚きました。ところでセンセイ、必勝法はあるものでしょうかね」

話の継ぎ目でいちいち振り返るので、危なくってしようがない。麻雀の話に夢中になって事故を起こされたんじゃないまらない。私の前のシートの背に両手をかけ、半身をのり出すようにして、

「必勝法なんてないと思うよ。麻雀は運。運だけ。だから面白いんじゃないの」と、受け答えをしなければならぬのだ。それでも運転手は興奮してきて、

「嫌な奴もいますぜ。こうやって牌を積むでしょう……」

と、ハンドルから両手を離して、インチキ積みの手つきを再現しようとする。

「ハンドル、ハンドル！」

私は連呼し、冷汗をびっしりかき、足を突っ張り、自分でブレーキを踏んだつもりになっている。麻雀は、話をするだけでもスリリングであり、命がけでもある。

ホテルのドアマン、寿司屋の兄ちゃん、ラーメン屋のおやじ——みんな麻雀好きであり、このところ負けがこんでいるけれど、勝つマジナイをくれと言ったりする。

顔なじみになると、誘われて断わってばかりいたのでは愛敬がない。それじゃと、店がはねた後、待ち合わせて卓を囲んだりする。

タケさんと識り合いになったのも麻雀が縁であった。

その頃、彼はある鉄板焼屋に勤めていた。そこは新鮮な海のネタを揃えているので、上京す

ると必ずと言っていいほど私は顔を出していた。私が行くと、いち早く発見し、手を上げて、自分の方へと招くのである。ひよろりと背が高いので、何かを見つけるのには便利であるようだ。

「ハイ、イカね。このモンゴウは一級品ですぜ。どうです、白板にそっくりじゃありませんか。昆布に紅葉おろしをつけて大三元。ははは、こりゃ縁起ものですよ」

と、一人で悦にいるほどの麻雀狂でもあった。鯔の叩きを前菜としてすすめながら、

「鯔はまあいい魚ですが、サンマはよくありません。あれは邪道ですよ。あんなもの麻雀じやありません」

鯔がするりとサンマ（三人麻雀）にすり換わってしまうのだから、ほとんどビョーキと言ってもよからう。

ある夜、タケさんはニンニクを刻む手をふと停め、やおら調理台に両手をついて、

「お願いです。今夜店がハネたら、お手合わせをしていただくわけにはいきませんかでしょう」

と、真剣な表情をこしらえた。色白の頬にぽつと紅がさし、目には涙まで溜めていた。

「ああ、いいよ」

頷いて私は、頭の中で、忙しく仕事の予定を変更してしまった。麻雀に関しては、私は実にだらしないのである。

うまいことに私は最後の客だった。デザートメロンを食べている間に、タケさんは仲間

連絡を済ませ、さっと着換えて裏から出てきた。

「今夜は最強メンバーを集めましたから」

と、心底嬉しそだった。

車でかなり走って連れこまれたのは、高田寺の駅の近くにある、針のように細いビルの四階だった。

「これ、全部、お袋の持ち物なんです」

お袋と言う時、タケさんの声は暖かく湿り気を帯びた。一階が果物屋になっていて、それがお袋さんの生業らしかった。彼は一人息子だけれども、家業を継ぐ気はないとも言った。

四階は、まるで長門家みたいに麻雀部屋になっていた。中央に立派な卓が一つ据えられていて、お手のものの果物の大盛りがあったり、日本で売られている煙草たばこが全種取り揃えられていたりした。

早速、八本の手が牌をかき混ぜ始める。

最初に和あがったのはタケさんだった。一つ喰くったチャンタであつた。黒棒を三本、五本と集めながら、

「失礼、申しわけない……」

タケさんは、長身を利して私の手をさっとのぞきこんだ。

「うーん、やっぱり」

彼は大仰おおぎように感心した。

ドラが^アで、私の手は暗刻^アだった。奇しくも^{●●●●}も三枚持っていて、^{●●●●●●}が頭^{あたま}になっていた。もし、頭をもう一枚引いたら、大変な手に成長するところだった。

「やっぱりね、ウン、そうなんだ」

と、タケさんは何度も頷いた。

メンゼンで行こうと思っただけでも、喰って安和りをしてよかつたんだと、自分に納得させているみたいだった。

次の局、私はリーチをかけた。何でもないクソリーチだった。いわゆる「駄作リーチ」である。おた風^{かぜ}が暗刻の、カン^ハというきわどいものだった。

ちなみにこの「駄作リーチ」という言葉は、私が流行^{はや}らせたものである。

麻雀プロの中に田村光昭という人物がいて、いきなり早いリーチをかけてくるのを得意としている。彼の麻雀はペース取りの麻雀であって、悪い形を切り落として、陣形を整え直して迫ってくるのではなく、とにかく一刻も早く前に出てこようとするのだ。リーチが早い割りには形が悪く、駄作手が多いので命名したのであった。

北
●
發
四萬
……

というような、平凡な切り方の手なりの打ち方をしたリーチであった。

このリーチに、タケさんは一発で^ハを打ってきた。そして唸る^{うな}。

「うん、やっぱりそうか。そうだったのか。うまい待ちだなあ」

そう言って他の二人に、手の中に三枚ある^トを見せたのであった。

「よほどこいつを打とうかと思ったのだけれど、四が光って打ちづらいものなあ。七の字を意識させて置いて八で待つ……うーん、さすがですよ」

一人で感心していた。

どうってことはないのである。最短距離でテンパイへと向かったただけの話である。それを褒められたのでは、尻がこそばゆかった。

裏ドラがおた風になって満貫^{まんかん}になった。

私は、それで勢いにのり、その半荘^{はんしょう}の終わりに四暗刻^{スーアングコ}を引き和った。

明け方まで打ち、私の完勝であり、タケさんの一人敗けの形になった。

タケさんは学究肌の麻雀打ちだった。こうなればこうなると、理屈を考え過ぎるのである。五五六とあれば、好牌先打をしなければと、五を早く手放してしまうのである。ツモってくる牌のき方には、法則があるわけではなく、運に身を任せて、手をふくらましていく方が和りを拾えるのだけれども、彼はそれでは気が済まないらしかった。

私のリーチに対しても、理屈で読んで向かってくる。これは大変有難いことであり、牌はもととデタラメにやってくるのだから、手なりに打っていると、河^カは解答が出し難いクイズになっている。

「あれもある、これもある」

と考えてくれるのがつけ目であり、考え抜いて落とし穴に自ら落ちると、何を切っているのか分からなくなってしまうのである。

運についても、彼は常識的な見解を持っていた。南家ナンチャになったら、二繚落リヤンフアンとしてでも和り、次に、和り親を迎えなければならぬといった風な。

私だったらそうは思わない。安く和るよりも、もし和れる見こみがあるのなら、高く和った方がずつといい。チャンスは、十二分に生かさねばならない。

一死二、三塁でバッターは三番。四点のリードで九回の裏。

ここでバントという手もある。意表をついて一点をもぎとり、満塁ホームーを打たれても逆転出来ない点差にしておくという考え方もあるだろう。一昔前には、川上野球というのもあった。

だがしかし、麻雀に於ては、野球みたいな計算が出来ない。荒稼ぎ出来るのを安くすんなりまとめてしまうと、運を他人にノシをつけて差し上げることもなってしまう。本来なら、K Oパンチを見舞えるところを、ジャブ程度の打撃しか加えられないことになる。すると次の回、相手が猛烈にツイてきたりするのである。

タケさんは、運を理解してしまっているところがあって、小細工でコントロールしようとするから、どうしても麻雀のスケールが小さくなってしまふのだ。運は化物であり、得体の知れないものである。理解することなど出来つこない代物しろものでもあるが、どこか人なつこい正直なところがあって、頭をなでてやっている、甘えてしなだれかかってくれたりする。まるで、大きな象みたにかわいい生き物でもある。

完敗したタケさんは、意を決したように立ち上がり、飾り棚をのぞきこんで、

「これを貰って下さい」

と、パイプを取り出して紙にくるんだ。

「パイプはやらないし、私には無用の長物です。いただくわけにはいきません」

私が断わると、目尻をきりきりと吊り上げてタケさんが言った。

「男の気持ちを分かって下さい」

「……………」

「大切なものを押しつけたい心境なんです。帰りに捨ててもいいですけど——いや、それは困りますけど、とにかくこれは、持っていて欲しいんです」

「よく分かりません」

「分からなくていいんです。私の真心みたいなものです」

「ハア、そんなものですか」

とうとう私は、真心まで押しつけられてしまったのだった。

使いこんだパイプだった。誰かの推理小説で、パイプについての知識に触れたことがあるのだが、凝る人にとっては、パイプはたいそう価値があるらしいのである。押しつけられたものが、高価なものであることはおぼろげながら分かった。しかし、猫に小判であり、私が持っている一文の値打ちもないのである。困ったけれど、真心とあらば、持ち帰らないわけにはいかなかった。

それからタケさんとは何回か打った。打つ度に、パイプのコレクションが当方に移動して

くる。

タケさんは多分、麻雀を学ぶ気になっているのだろう。一夜打つ度に、勉強した気分がして、大切にしているものを犠牲にしないと気が済まぬのであろう。

パイプが七本ほどこちらへ移動してきた頃、彼はニューヨークに発ってしまった。日本食がブームだとかで、引き抜かれたのであった。

“海外へ雄飛して、人間を鍛え直してきます。日本に戻ってきたら、ぜひとも一番お手合わせを願います”

と、タケさんらしい挨拶状あいさつじょうをくれた。

このような人物は、麻雀なんか強くななくていいのではなからうか。実直で堅実な市民生活を送ればいいし、そう出来る人物なのである。

タケさんは今、ニューヨークでどうしているだろうかと、考える度に微笑が浮かんでくる。きっと大マジメで英語を学び、あの細い指で、エビやイカを料理していることであろう。彼と識り合ってよかったと思うし、だとしたら、麻雀打ちとしての虚名も満更捨てたものではないのである。

かつて、ある出版社の主催する『文芸講演会』に律義に付き合っていたことがある。地方都市を四か所ぐらいまわるわけだが、行く土地土地で雀鬼たちが手ぐすねをひいて待っていた。

“センセイ、どうです、今夜”

と、講演が終わる度に誘われたものだ。同行した田辺聖子さんが、